

## 1 趣 旨

小学校高学年期の子供が長期間の共同生活の中で全力を出し切って取り組む活動をとおして、激動の世の中を主体的に生き抜く力の基礎を育むことを目指す。

## 2 ねらい

困難な状況に挑戦し、他者とかかわり合いながら課題を克服する経験を積むことをとおして、主体的に生き抜く力の基礎を育てる。長期宿泊体験や粘り強く取り組む活動を通して、主体的に考える力、共通の目標に協力して取り組む力を育成し、自己肯定感を高める。



## 3 日 程

- (1) 期 日 平成30年8月11日(土)～8月21日(火)【10泊11日】  
 (2) 参加者 18名(石川県17名,富山県1名)  
 (3) 研修内容及び講師

7月22日(日)	出 会 い	○事業説明 ○実習「アイスブレイク」 ○実習「サイクリング」 ○事前アンケート
8月11日(土)		○開講式 ○実習「アイスブレイク」 ○実習「登山の準備」
8月12日(日)	チ ー ム 作 り	○実習「白山登山」(県立白山ろく少年自然の家～別当出合～白山室堂)
8月13日(月)		○実習「白山登山・下山」 (室堂～山頂・御前峰～別当出合～県立白山ろく少年自然の家)
8月14日(火)		○実習「イワナつかみ体験」「サイクリング約20km」 (県立白山ろく少年自然の家～県立白山青年の家)
8月15日(水)	チ ャ レ ン ジ	○実習「フォトオリエンテーリング」「野外炊飯」
8月16日(木)		○実習「サイクリング約78km」(県立白山青年の家～国立能登青少年交流の家) 台風のため中断(約19km 走破)
8月17日(金)		○実習「サイクリング約45km」 (国立能登青少年交流の家～能登島・松島オートキャンプ場)
8月18日(土)		○実習「サイクリング約74km」(能登島・松島オートキャンプ場～能登少年自然の家)
8月19日(日)		○実習「大型カヌー」(県立能登少年自然の家) ○実習「レクリエーション・ふりかえり」(県立能登少年自然の家)
8月20日(月)	旅 立 ち	○実習「サイクリング約34km・ふりかえり」(県立能登少年自然の家～禄剛崎) バス移動(禄剛崎～国立能登青少年交流の家)
8月21日(火)		○実習「ふりかえり」(国立能登青少年交流の家) ○閉講式

### (4) プログラムデザイン

ねらい達成に向け、長期間のキャンプを4つのステージに分けて設定した。仲間との共同体験により自己肯定感が高まるようねらいに合わせた活動を工夫し、効果的に子供の成長を促す。

#### 【4つのステージのねらい】

出 会 い	これからの活動に対し、新しく出会った仲間と共に取り組んでいこうとする意欲をもつ。
チ ー ム 作 り	同じ班の仲間と励まし合い、目的を共有しながら登山することにより、仲間意識を高める。
チ ャ レ ン ジ	困難なサイクリングに対し、仲間と声をかけ合いながらやり抜くことにより、仲間の大切さを実感する。
旅 立 ち	全日程をやり遂げた達成感を感じるとともに、自分の成長を見つめ、これからの自分の生き方について考える。

## 4 成果と課題

### (1) 3つの機能「自己決定・自己存在感・共感的人間関係」の変容を見取る評価

生き抜く力の基礎である「やり遂げる力」を支える3つの機能を「自己決定する・自己存在感を実感する・共感的人間関係を育成する」と定めた。これは、人が生きていくためには、課題解決に向け他者を大切にしながら自己決定すること、他者や自然を含む周辺環境の中で自己存在感を実感すること、相互に尊重し、信頼し合いながら共感的人間関係を育成すること、この3つが必要不可欠だと考えたからである。

#### ① 量的評価

##### ア ふりかえりカード

9つの評価規準(表1参照)を設け、それぞれ5段階で自己評価した。キャンプ前とキャンプ中(最終日を除く全日)の合計11回行った。また、子供自身が振り返り易くするため、自己評価のポイントをチャート図に表したり、全てのカードを1冊のファイルに納めたりした。

「石川縦断キャンプACTIVE2018」 ふりかえりカード ( ) 月 ( ) 日  
氏名( ) 班 ( )

※今日の1日の活動を終えて、今の自分について振り返ってみましょう。 (評価項目) ◆評価点を下のチャート図に表そう!

自分で決める	① 自分から進んで友達やスタッフに話すことができたか。	
	② 指示されるだけでなく、自分で考えて行動することができたか。	
	③ あきらめないで最後までがんばりぬくことができたか。	
自分の存在感を感じる	④ 自分自身のよいところを見つけることができたか。	
	⑤ 自分が役に立っていることを感じることもできたか。	
	⑥ 周りの仲間から支えられていることを感じることもできたか。	
仲間と協力・協働する	⑦ 友達と励まし合って活動に取り組むことができたか。	
	⑧ 友達のよいところを見つけたり、感じたりすることができたか。	
	⑨ 相手の気持ちを考えながら話したり、行動したりすることができたか。	

評価点 5…よくできた 4…まあまあできた 3…どちらとも書えない 2…あまりできなかった 1…できなかった

9つの点を線で結んでみましょう!

＜今日の活動を振り返って：チャート図を見て気づいたことを書こう＞

がんばった自分へのメッセージ!

##### <ふりかえりカード>

3つの機能	評価規準
自己決定	自分から進んで友達やスタッフに話すことができたか。
	指示されるだけでなく、自分で考えて行動することができたか。
	あきらめないで最後までがんばりぬくことができたか。
自己存在感	自分自身のよいところを見つけることができたか。
	自分が役に立っていることを感じることもできたか。
	周りの仲間から支えられていることを感じることもできたか。
共感的人間関係	友達と励まし合って活動に取り組むことができたか。
	友達のよいところを見つけたり、感じたりすることができたか。
	相手の気持ちを考えながら話を聞いたり、行動したりすることができたか。

表1「9つの観点、その評価規準」

##### イ 保護者・担任・児童による評価

キャンプ前とキャンプ終了1か月後に保護者と担任、児童本人による評価を行った。ふりかえりカードと同じ3機能について評価することで、家庭生活や学校生活においてどのように生かされているか見取った。児童・保護者・担任による評価は、3機能の評価の観点と評価項目として、それぞれ次のように設定した。児童・保護者は58項目、担任は20項目についての評価項目を実施した。

3機能	評価の観点	担任評価項目数	保護者・児童評価項目数
自己決定	自己決定志向性	2項目	5項目
	他者決定選考の少なさ	2項目	4項目
	自己決定不安の少なさ	2項目	3項目
	自己決定マイナス感情の少なさ	2項目	4項目
	自己決定の効力感		4項目
自己存在感	価値感	2項目	6項目
	目標感	2項目	6項目
	受容感	2項目	7項目
共感的人間関係	共感的関心	2項目	6項目
	視点取得	2項目	7項目
	苦痛共有感	2項目	6項目

表2「3つの機能、11の観点とその評価項目数」

	No.	質 問
自己決定	1	自分のことは自分で決めたいと思っている。
	2	大事なことはだれか（親・先生・友達）に決めてもらいたいと思っている。
	3	何かを自分一人で決めるときに不安になっている。
	4	だれか（親・先生・友達）に指示されるのが嫌（きら）いである。
	5	だれか（親・先生・友達）に指図されないと、なまけてしまう。
	6	難しいことにぶつかったときには、だれか（親・先生・友達）にまかせた方がうまくいくと思っている。
	7	自分で決めて行ったことには、責任を感じている。
	8	まわりから反対されても自分かとてもやりたいことは、やろうとする。
自己存在感	1	自分のことが嫌（いや）になることが多い。
	2	自分には気を許せる（何でも話せる）親しい人たちがいる。
	3	現在の生活になんらかの目標を持っている。
	4	自分には、自慢（じまん）できるところがあまりないと思っている。
	5	現在、心から打ち込んでいる（熱心に取り組んでいる）ものはない。
	6	周りの人は、自分のことを信用してくれていると感じている。
共感的人間関係	1	だれかをせめる前に、自分がその人だったら、と考えている。
	2	友達や家族が困っていても、あまり気にしない。
	3	困っている人を見ると、どうしていいか分からなくなる。
	4	悲しそうにしている友だちをみると自分まで悲しくなってくる。
	5	友だちが言いあらそっているとき、だれが正しいのかを決める前に、児童はみんなの意見を聞こうとする。
	6	だれかがけがをするような大変なことが起こったら、どうしていいか分からなくなる。

表3 「担任アンケート」

②質的評価

ア ミニ作文・ふりかえり作文

毎日のふりかえりカードに、ミニ作文の欄を設け、その日の気付きをその日のうちに記入できるようにした。キャンプ最終日は、自分の成長や今後の過ごし方等について文章でまとめた。

イ 参与観察

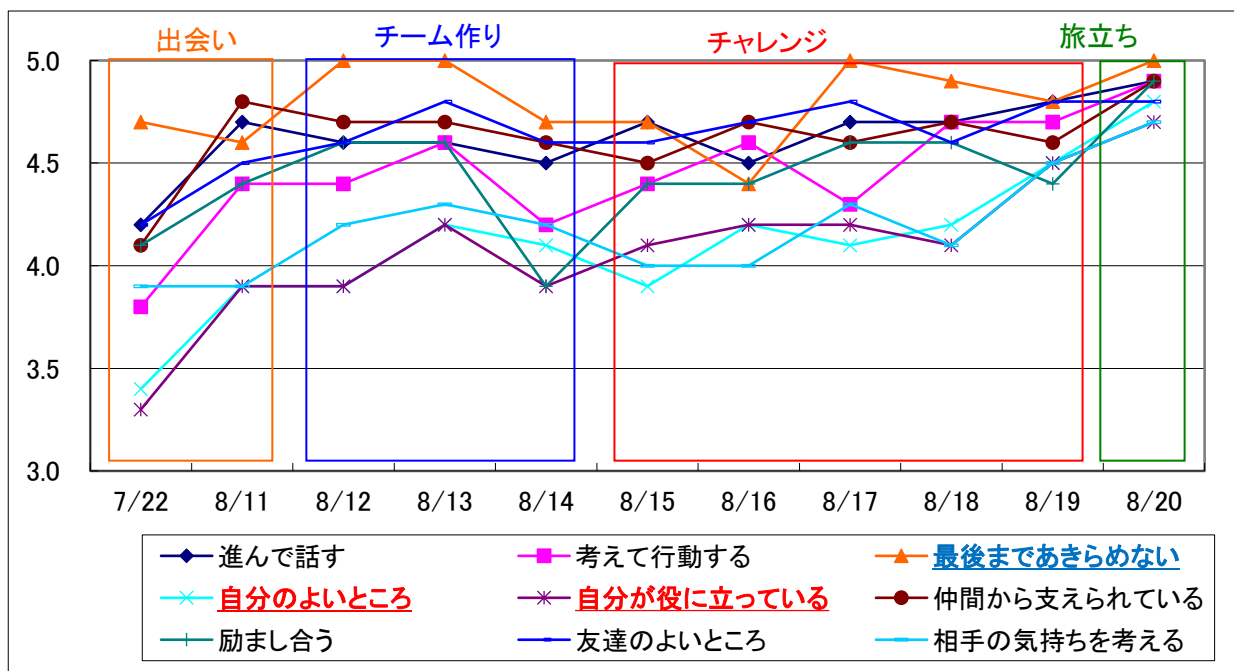
班付きスタッフは各班2名を配置した。スタッフには手帳を配付し、子供の変容について一緒に活動するスタッフならではの視点で記述するようにした。なお、記録にあたっては、プログラムデザインに位置付けているねらいと、9つの評価規準を意識した。

ウ いいところみつけ

振り返りの時間に、自分のいいところを仲間やスタッフからフィードバックしてもらった。このことにより、自分が役立っている、仲間から支えられているという実感が高まり、自信になり、自己肯定感の向上につながることをねらいとした。

(2) 量的評価の結果と考察

①自己評価（5段階評価の平均：有効回答数18）



グラフ1 「観点別得点の推移」

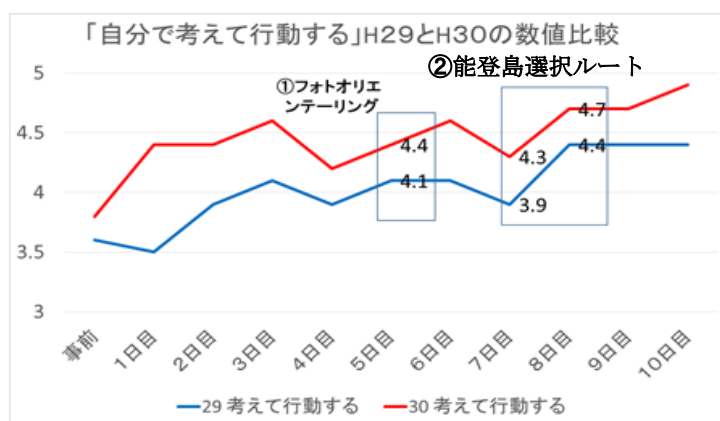
- ・9つの力とも「出会いのステージ」から「旅立ちのステージ」にかけて大きく得点が上昇している。
- ・「最後まであきらめない」の観点で、白山登山の日（8/12・13）、サイクリング行程の能登島選択ルートを行進した日（8/17）、禄剛崎にゴールした日（8/20）にそれぞれ高得点（○）を示している。このことから、生き抜く力の3機能の高まりは、最後まであきらめないでやり遂げ、達成感を味わったことと関連があると考えられる。
- ・特に着目したいのは、「自分のよいところを見つける（○）」「自分が役に立っている（○）」の観点である。上昇率はどちらも1.4ポイントと9観点のうちで一番大きく向上した。これは、仲間と支え合いながらともに困難なキャンプをやり抜いたことが、自分自身への自信となったものだと考える。長期のキャンプだからこそ、継続的な自己評価・相対評価の場を設定することができる。そして、仲間との関係性の中で自分自身をじっくりと見つめ、自己肯定感を高めていくことにつながったと言える。

### ＜選択コースの設定＞

チームで決めた目標を具現化しやり遂げることで自己肯定感を高めるためには、自分で考え判断し行動する場の設定が大切である。そのため今年度も、子供たちが自ら考え判断する場を意図的に仕組む必要があると考え、「フォトオリエンテーリング」「能登島選択ルート行程」を取り入れた。この2つの選択コースではスタッフが先導せず、チームでルートを考え、子供たちだけで話し合いながらゴールを目指すというプログラムを実施した。

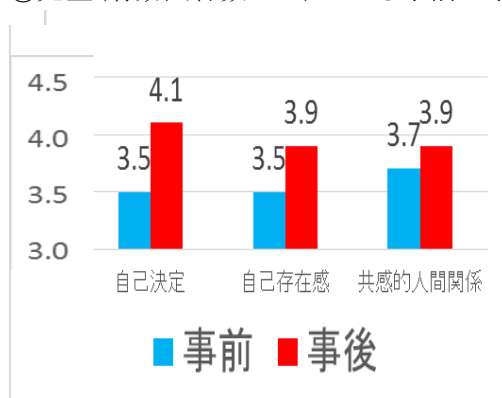
### ＜H29年度 ACTIVE との自己評価比較＞

全体的に昨年度より0.3～0.4ポイント高かった。「自分で考えて行動する」の評価は、フォトオリエンテーリングの翌日は0.2ポイント、能登島選択ルート2日目（8日目）では、数値が0.4ポイント上昇した。チーム内で主体的・対話的に考え、行動する場面が多くあり、その効果が現れたためだと考えられる。フォトオリエンテーリング、能登島選択ルートは、子供たちの「自ら考え判断し、行動する力」を育むためにとても有効なプログラムであった。

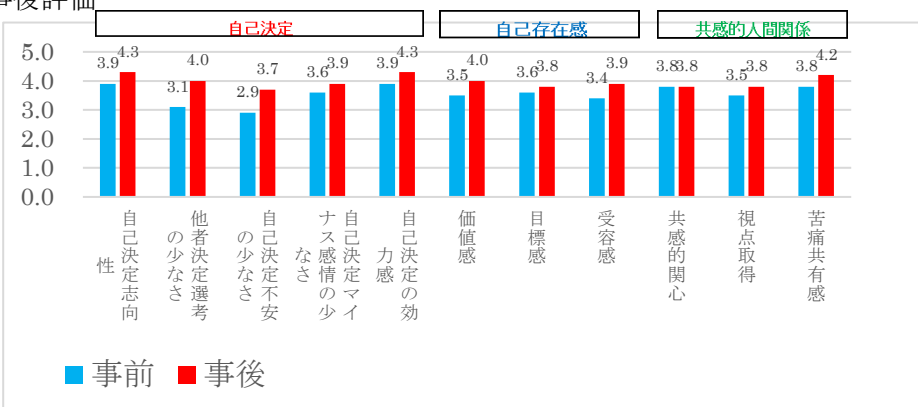


グラフ2 「自分で考えて行動する」H29とH30の数値比較

### ②児童(有効回答数16)による事前・事後評価



グラフ3 「児童による評価」

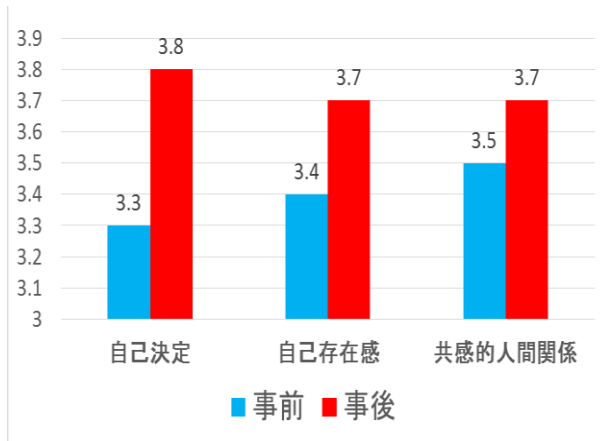


グラフ4 「児童観点別評価」

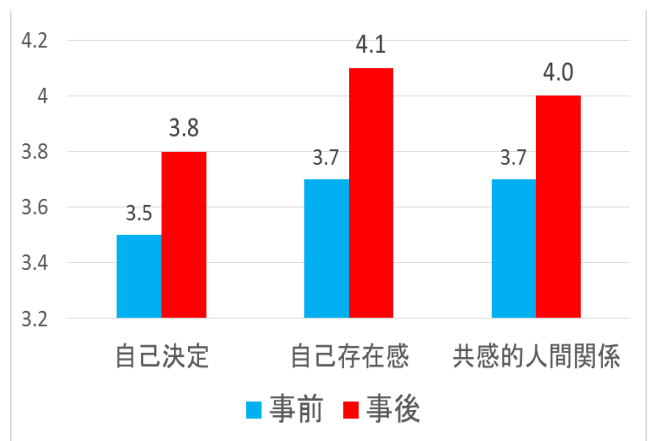
児童の観点別評価では、自己決定の機能の中では「他者決定選考の少なさ」の観点で0.9ポイント、「自己決定不安の少なさ」で0.8ポイント、「自己決定マイナス感情の少なさ」では0.3ポイントの上昇が見られた。自己存在感の中では「価値観」で0.5ポイント、「受容感」で0.5ポイントの上昇が見られた。

特に、「他者決定選考の少なさ」の4項目、「自己決定不安の少なさ」の3項目すべてが大きく上昇しており、プログラムを通して自己決定していく中で、自分の思いや考えを主体的に発揮することが身についたと考えられる。

③保護者(有効回答数16)・担任(有効回答数16)による事前・事後評価



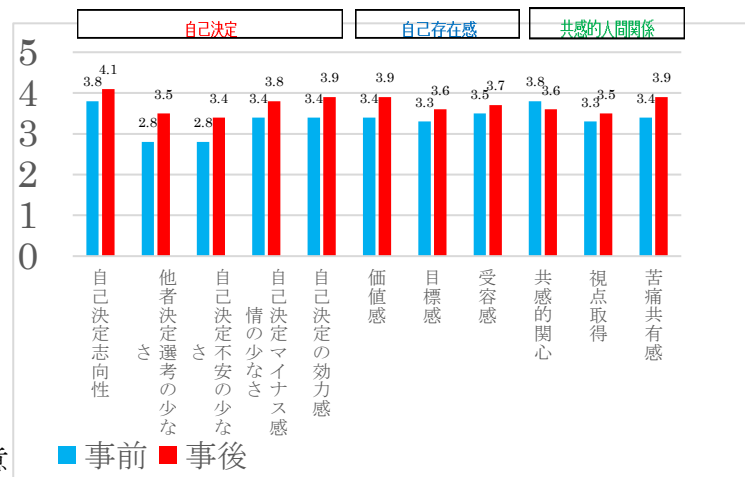
グラフ5 「保護者による評価」



グラフ6 「担任による評価」

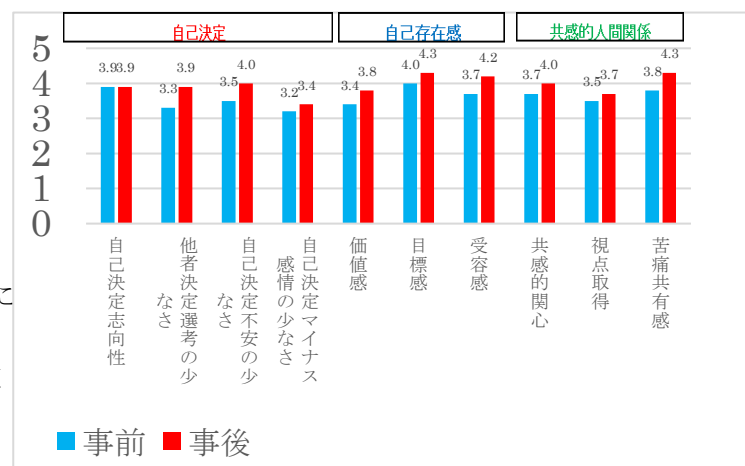
事業終了後1か月後で全ての機能の得点が事前に対して上回っている。本事業を通して培った力が、家庭や学校においても生かされている。特に、保護者評価の「自己決定」や担任評価の「自己存在感」の機能の数値が大きく上昇した。

保護者の観点別評価では、自己決定の機能の中では「他者決定選考の少なさ」の観点で0.7ポイント、「自己決定不安の少なさ」で0.6ポイント、「自己決定の効力感」では0.5ポイントの上昇が見られた。自己存在感の中では「価値観」で0.5ポイントの上昇が見られた。共感的人間関係の中では「苦痛共有感」で0.5ポイントの上昇が見られた。特に、自己決定の「誰かに決めてもらうより、自分のことは自分で決める」(他者決定選考の少なさ)、「自分の将来は自分の考えや意志によって決まる」(自己決定効力感)という評価が大きく上昇した。



グラフ7 「保護者観点別評価」

担任の観点別評価では、自己決定の機能の中では「他者決定選考の少なさ」の観点で0.6ポイント、「自己決定不安の少なさ」で0.5ポイントの上昇が見られた。自己存在感の中では「受容感」で0.5ポイントの上昇が見られた。共感的人間関係の中では「苦痛共有感」で0.5ポイントの上昇が見られた。特に、自己決定の「難しいことにはぶつかったときは、誰かに任せるのではなく自分で決める」(他者決定選考の少なさ)と、自己存在感の「自分は信頼されている」(受容感)の評価が大きく上昇した。



グラフ8 「担任観点別評価」

児童、保護者の評価に共通していることは、3機能の中では自己決定の機能のポイントが大きく上昇しており、担任の評価では、自己存在感の機能のポイントが大きく上昇していることである。

また、三者に共通していることは、自己決定の機能の中での「他者決定選考の少なさ」、「自己決定不安の少なさ」のポイントが大きく上昇しているということであり、主体的な行動や姿勢の変化が自己肯定感の向上の大きな要因であると言える。

### (3) ふりかえり作文より抜粋

- このキャンプを終えて思うのは、僕たち 18 人を支えてくれた人への感謝です。この人たちがいなかったらこのキャンプは成功しなかったと思います。同時に、仲間って大切だと思いました。「一人じゃ乗り越えられない壁も、仲間がいると乗り越えられる」、それを体感しました。一人の声がみんなの心に響き、みんなの感謝が一人の心に響き、一つになっていきました。チームは一つになってしまえば、どんな大きな壁でも戦えると思います。そして ACTIVE2018 は連戦連勝、壁に勝ち続けて、全員で最終日の振り返りをすることができました。
- 私はこのキャンプに参加できてよかったと思いました。それは普通ではできない体験を通して、できたことや知ったことがあったからです。できたことはめあてにもした「自分から行動する」ということです。初めは一人で行動していたり、誘われる方だったりしました。でも登山やサイクリングでは、前の人から伝わってきたことをしっかり次の人に伝えたり、応援できたりしました。そして最終日の今日、自分から部屋の片づけをして、ゴミを自分のでなくても持ち帰ったり、一人で歩いていた仲間に声をかけたりできました。これらのことから知ったことは、「仲間の大切さ」です。仲間がいると、話して笑って楽しくなれました。

このように、目標をもって参加した子供たちは、キャンプを通して主体的に活動に取り組む中で、仲間と協力することで自己存在感が高めていった。そしてお互いに支え合いながら一つひとつの壁を乗り越え、共感的な人間関係を築いていった。そのことが自己肯定感の向上につながった。



1日目  
自分の思いを書く



2日目  
白山室堂で振り返りを書く



毎日の振り返り  
で書いてもらっ  
たいとこ見  
つけカード



一人ひとりの思いのつ  
まったチームフラッグ



8日目  
能登島選択ルートの振り返り



10日目  
チームフラッグを持ってゴール



11日目  
閉講式で仲間への感謝を述べる

### (4) 成果と課題

#### 《成果》

- 自己肯定感を高めるために、生徒指導の3機能を用いた評価の手法は有効であった。自己肯定感を構成する3つの機能（自己決定、自己存在感、共感的人間関係）が効果的に働いた。主体的に活動し自信をつけながら自己肯定感を高まった。
- ねらいを明確にし、4つのステージに区切り、その中で自己肯定感を高める手立てを考え、参加者が主体的にプログラムに取り組める工夫を行った。
- 活動のねらいをスタッフ・参加者が共有することで、ステージのねらいに沿った活動を仲間と協力しながら、粘り強く最後までやり遂げることができた。
- 県内の公立3施設と連携し、事業のねらい等を共通理解することで、組織的に事業を作り上げることができた。

#### 《課題》

- 自己肯定感を見取る評価を事前と事後で実施したが、それぞれの評価の相関性を見取りや、このキャンプを通して培った力により学校生活や家庭においてどのような変容が見られたかを継続的に調査するなど、評価の在り方を探っていきたい。
- 各ステージごとに重点的に高めたい力を意識し、それに合わせたプログラムを検討していくことが必要である。
- 登山やサイクリング行程において天候や時間の遅れにより、計画の変更が必要な場面がある。安全面での危機管理マニュアルの事前準備や、各施設との連携を密にした支援体制等を、より整備していく必要がある。